

陸連時報 三

2018
平成30年

11

月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

第18回アジア競技大会(ジャカルタ/パレンバン)を終えて(強化委員会).....	182
第26回日・韓・中ジュニア交流競技会 韓国大会を終えて (全国高等学校体育連盟陸上競技部競技力向上委員会 大林和彦).....	186
2018 コンチネンタルカップ報告 (強化委員会男女3000mSC オリンピック強化コーチ 岩水嘉孝).....	188
第3回アジアユース陸上競技選手権大会(2019/香港).....	189
インターハイにおける科学委員会研究活動報告(科学委員会 高松潤二).....	190
JAAF公認ジュニアコーチ 兼 日本スポーツ協会公認スポーツリーダー養成講習会のお知らせ.....	192
AIMS理事会・総会報告(専務理事 尾縣貢(AIMS理事)).....	194
大会観戦ガイド.....	195
陸協NEWS.....	196
事務局からのお知らせ.....	198

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

第18回アジア競技大会(ジャカルタ/パレンバン)を終えて

【はじめに】

ジャカルタアジア大会は、2016年リオデジャネイロオリンピック以降、2020年東京オリンピックに向けた4年間の強化施策の中間総括として位置づけられた。東京オリンピックで一つでも多くのメダル・入賞を獲得するために、アジア大会では金メダルレベルのパフォーマンスが求められると考えた。つまり、金メダル獲得数がおおきな評価ポイントとなると考え、臨んだ。

また、東京オリンピックが酷暑の中で開催されることは周知の事実である。今回のジャカルタでの大会も高温多湿な環境の中での開催が予想されたため、そのリハーサル・の機会としても有効と考えた。特にマラソンや競歩において暑熱環境下でいかに高いパフォーマンスを発揮するかがメダル獲得のためのポイントになるとして、その対策を研究、調査してきた。今大会はこれまでの成果を確かめる意味において重要な機会となった。

さらに、国際陸連の方針で来年1月からワールドランキング制度が始まる。これまで、オリンピック、世界選手権への出場権は、基本的に参加標準記録によって規定されていたが、この制度の発足により、記録をポイント化するとともに、その記録をマークした大会での順位もポイント化して、両者の合計ポイントによってランキングをつけようとするものである。同時に、大会自体もランキング化され、順位ポイントが大会によって異なることから、選手たちも出場する大会を戦略的に選択しながらシーズンを過ごすことが求められるようになる。アジア大会などのエリア選手権は大会の格付けも高いので、順位ポイントを稼ぐことにおいて有益な機会となる。東京オリンピックを目指す選手たちにとっては、今回のアジア大会、2019年シーズンに開催されるアジア選手権、世界選手権とポイントを着実に積み重ねていくことが重要である。その意味では、東京オリンピックへの具体的なプロセスは、このアジア大会から始まったと言える。

【選手選考の経過】

ジャカルタアジア大会の代表選手選考に向けて、本連盟強化委員会においては、2016年リオデジャネイロオリンピック後に構築された種目特化型の体制に見合う選考要項の作成に取り組んだ。すなわち、カテゴリー化された種目ごとに資格記録を設定し、それを基に内定を含む選考基準と優先順位を決定した。中でも過去大会の実績から算出された「アジアメダル期待記録」を重要な基準として、その突破者を中心に選考を行った。

今回、リオデジャネイロオリンピックの代表選手選考時に問題提起された「記録の信頼性」に関する課題をクリアするために、特に内定基準を適用する競技会を限定することとした。また、これまで国内の競技会を中心に選考対象としてきたが、今回から、国際陸連の主催するダイヤモンドリーグなど、海外の高レベルの競技会での記録に高い優先順位を与えた。

このように定められた選考要項にしたがって、男子35名、女子23名、計58名を選考した。結果として、そのほとんどが「アジアメダル期待記録」を突破したメンバーで構成されることとなった。

【競技の総評と反省】

6日間の大会を振り返って、個々に見ると物足りない選手もいたかもしれないが、全体としては、選手たちは自身の力を非常によく発揮した。また、選手の頑張りはもちろんだが、情報共有や共通理解、共通認識など、スタッフ間の横の連携がとてうまく機能していた。この大会は、運営面においてこれまでになく、さまざまな場面で問題が多発したが、そのような状況の中でもうまく対応していくことができた。これはチームとして戦う上では非常に大切なことであり、その背景にスタッフの連携があった。

当初、4つの金メダルを目標に掲げて臨んだが、結果は6つとなった。このうちで想定されていたのは、男子のマラソン、50km競歩、十種競技、4×100mR。これらは代表選考時点でのランキング1位の種目であった。パフォーマンス発揮の状況については各コーチの報告に委ねるが、どの種目も簡単に金メダルを獲得できたわけではなく、周回準備の結果としての金メダル獲得であったことは言うまでもない。

これに加えて、男子200mと男子棒高跳で金メダルを獲得した。

男子200mに関しては、最近進境著しい小池選手がこの大舞台でも力を発揮して結果を残した。彼の今後にとっても大きな収穫だったと思う。棒高跳の山本選手に関しては、2013年モスクワ世界選手権で入賞を果たして以来、伸び悩んでいるところがあったが、海外に積極的に出て修行を積んだことが今回の成果につながったと考える。

メダルの総数についていえば、前回の仁川アジア大会は金3、銀12、銅8だったが、今回は金6、銀2、銅10という結果となった。メダル全体の数としては減っているが、アジアのレベルが非常に上がっていることが理由の1つとして挙げられる。もともと強かった中華人民共和国のほか、中東だけでなく、インドなどもパフォーマンスを上げてきており、さらに、タイやベトナム、インドネシア、大韓民国、チャイニーズ・タイペイなどにも良い選手が出てきており、簡単に勝たせてはもらえなくなってきている。その中で金メダル6というのは、評価に値するのではないかな。ただし、「世界大会でメダル・入賞」ということを考えたときには、アジアの大会では「金」というレベルで力をつけなければならない。その意味においては、前回よりも3つ増えたということは、来年の世界選手権、そして、再来年の東京オリンピックに向けての第1ステップとして、良い形での踏み出したのではないかな。

一方で、メダルにあと一歩となる4位、5位が多く見られたことは、今後の課題の1つになる。また、銅メダルを10個獲得したが、その銅メダルの中にも、健闘して3位までもっていくことができたものもあれば、逆に本当は金や銀が獲れたのではないかなというものもあった。いずれにしても、今回到達したレベルを基準にして、来年、再来年といかに積み上げていけるかが課題となる。

女子の最高成績はマラソンの銀メダルであった。男子に比べて全体的に結果が出ていない。日本女子トラック&フィールド部門の柱となるべき選手を育成していくことが重要であろう。また、新たなタレントの発掘、養成も大きな課題となる。

今大会において、故障などで思ったように力を出せない選手が何名も見られた。コンディションチェックには継続して取り組んできているし、問題を抱えた選手へのアプローチも医事委員会のドクターに協力を仰ぎ、かなりの成果をあげている。しかしながら、正確な情報を提出していない選手もみられることから、代表決定後のコミュニケーションをもう一度見直していく必要はある。

東京オリンピックを考えたときに、今回は、それに近い気象条件下での競技会となった。マラソン及び競歩に関しては、暑熱対策において一定の成果が上がっている。全体の傾向は大体つかめてきているので、今後は、一人一人の個性にどうアジャストさせていくかが課題となってくると考えられる。

【選手村の生活について】

陸上競技には、役員・選手に合計27部屋が割り当てられた。居住環境としては、アジア競技大会開催期間の後半に入ってきた陸上競技は、前半に生じていた諸問題をJOC本部が解決していただいていたため、特に不自由はなかった。選手村内はWi-Fi完備、通信速度も問題なかったため、選手との連絡をスムーズに行うことができた。食事については、各地域の料理が用意されており、渡航前は不安であった体調面に関しても大きく体調を崩す選手もおらず特に問題はなかった。また、競技終了後選手村に戻ってくるのが24時近くになることもあったため、JOC本部の協力により遅い時間でも食事がとれるよう手配いただいたことは非常に助かった。アイシング等に使用するための氷はダイニングの入口付近と棟の2階でももらうことができたため不自由することはなかった。

また、現地ボランティアスタッフもとても丁寧な対応をしてくださる非常に助かった。ミーティングの手配においてミスもあったが、ボランティアを統括するスタッフが数名いればこのような事態も防げるのではないかと感じた。

輸送関係については、トランスポートモールのシャトルバスは、通常の国際大会のように決められた時間で運行されていたため不安もあったが、前日24時までに1階のトランスポートデスクで申請すれば、臨機応変に対応してくれたため大きな問題は発生しなかった。バスによっては、陸上競技場直行ではない場合もあり、多少の時間

的な余裕を持つての行動は必要ではあったが、交通整備をしていたことで選手村から競技場までは、通常で30分～45分程度で到着することができたためさほどストレスを感じることはなかった。

【各種目の報告】

【男子短距離】

男子100m

男子100mには山縣選手とケンブリッジ選手が出場した。山縣選手は日本選手権後のヨーロッパ遠征で足の違和感でダイヤモンドリーグロンドン大会を回避したが、その後は順調に回復しトレーニングを積み、自己タイ記録で銅メダルを獲得した。ライバルとされていた中華人民共和国のSU Bingtian選手、急成長のカタールのOGUNODE Tosin選手には敗れたが力を十分に発揮した。ケンブリッジ選手もメダル争いを期待されたが、準決勝ではスタートで出遅れが響き準決勝3着で敗退となった。

男子200m

男子200mには飯塚選手と小池選手が出場した。小池選手が自己ベスト記録の20秒23で金メダルを獲得した。今季は急成長を遂げ、大きく自己ベスト記録を更新し本大会に臨み、大舞台でも力を発揮し見事金メダルを獲得した。飯塚選手は日本選手権後も大きな故障はなかったものの調子を上げることができず6位であった。

男子400m

男子400mにはウォルシュ選手が出場し、45秒89で5位であった。メダルが期待されたが、7月に腰痛が出て、強化期に計画通りにトレーニングを積むことができなかったことが影響した。

男子4×100mR

男子4×100mRは山縣選手、多田選手、桐生選手、ケンブリッジ選手のオーダーで38秒16をマークし20年ぶりの金メダルを獲得した。目標としていた大会記録更新はならなかったものの各選手それぞれ持ち味を出して他チームを寄せ付けず金メダルを獲得した。4×100mRの層は厚くなってきておりこれからますますの相乗効果を期待したい。

男子4×400mR

男子4×400mRはウォルシュ選手、小池選手、安部選手、飯塚選手のオーダーで銅メダルを獲得した。記録も3分1秒台と4年ぶりの記録で今年取り組んできた世界のスピード化への対応の方向性は合っていると感じている。一方で個々の力をつけなければ世界大会のメダルには届かず、44秒台の力は必須である。

MIX4×400mR

木村選手、川田選手、宇都宮選手、山下選手のオーダーで5位であった。個々の力をつけなければ世界のトップチームと勝負することは難しく、また男女の走順が決まっていないためスピード差があり他選手と競るシーンが少なく一人でペースをつくり走れる選手の育成が重要であると感じた。各選手、この経験を次に活かしてほしい。

(男子短距離コーチ 土江寛裕・山村貴彦・小島茂之)

【女子短距離】

女子100m

女子100mは、福島選手、市川選手の2名が出場し、福島選手は予選において11秒99(-1.2m)4着で予選敗退となった。福島選手はここ数年アキレス腱痛に悩まされ、トレーニングが計画的にできていなかった。日本の短距離の要としてあせらず復帰してほしい。市川選手は予選において11秒94(+0.1m)5着で準決勝進出を果たした。準決勝は12秒02(+0.1m)8着で敗退となった。市川選手も日本選手権前からアキレスに違和感を持ちながらのトレーニングで、トレーニング不足が今回の結果にでた。

女子200m

女子200mは、福島選手をエントリーしていたが、100m予選後アキレスの痛みが悪化し、麻場強化委員長、山崎ディレクター、チームドクターと相談のうえ棄権することにした。

女子4×100mリレー

女子4×100mリレーは、1走御家瀬選手、2走市川選手、3走世古選手、4走青木選手のメンバーで臨んだ。結果は44秒93で決勝5着であった。福島選手の故障によりベストメンバー、ベストオーダーが組めず、目標タイム、目標順位には大きく及ばなかったが、日本女子の絶対的なスプリント不足を痛感させられた。リレーありきではなく、個人の資質を高める強化が急務である。

女子4×400mリレー

女子4×400mリレーは、1走川田選手、2走北村選手、3走宇

都宮選手、4走塩見選手のメンバーで臨んだ。結果は、3分34秒14で決勝5着であった。今大会のメンバー構成は、800mを専門種目とする川田選手、北村選手、塩見選手と、混成競技を専門種目とする宇都宮選手で臨んだが、それぞれの選手が持ち味を出して、予想以上のレース展開であった。ただ、日本の200m、400mの強化体制を改める必要があると強く感じた。

(女子短距離コーチ 瀧谷賢司)

【男女中距離】

男女800mは各2名ずつ出場し、男子は川元選手、女子は北村選手、塩見選手が決勝に進出した。決勝のレースではラスト300mからペースアップしてレースが動いたときに3選手とも対応することができなかった。そのためラスト勝負までにメダル争いから脱落してしまった。これに関して現在日本の男女でトップにいる川元選手、北村選手は国際的な立ち位置を考えると、本来の力を発揮できれば十二分に通用できたはずであったが、今大会までに故障で一時練習を中断していた時期もあり、大会本番で良いパフォーマンスを発揮できなかったことは今大会に向けた準備不足であり、残念な結果となった。

1500mでは男女通じて唯一の出場であった館澤亨次選手は今大会に向けて故障等もなく本番を迎えた。予選ではラストまで、もつれる展開であったが落ち着いて着順をとり決勝に進出した。しかし決勝のレースでは800m同様にラスト500mからのペースアップに対応できなかった。

今大会、男子中距離はカタール、バーレーン、インドが非常に活躍していた一方で、女子800mは中華人民共和国の選手が優勝したものの、実力差は拮抗していると感じた。

(男女中距離コーチ 松井 一樹)

【男女ハードル】

男子110mH

男子110mHには高山選手と金井選手の2名が出場した。高山選手は、予選を13秒84(-1.5)の1着で難なく通過し、決勝では13秒48(±0)で銅メダルを獲得した。スタートの反応に特化してトレーニングを取り組んできたことが十分に発揮できたのではないかと考える。今後の課題としては、このレベルのレースで前半よりアドバンテージが取れること、その中で後半の速度低下を抑えることが世界で戦うためには必要であろう。一方、金井選手は、予選を13秒81(-0.3)の2着で通過し、決勝では13秒74(±0)で7位に終わった。6月の日本選手権で13秒36の日本記録を樹立したが、そこに大きなピークを持って行ってしまったこともあり、本戦で思うように調子が上げられなかった。

男子400mH

男子400mHには安部選手と岸本選手の2名が出場した。安部選手は、予選を49秒71の1着で難なく通過し、決勝は49秒12で銅メダルを獲得した。予選から決勝にかけて歩数戦略を変更し、攻めに徹したが後半の速度低下が大きく、金メダル獲得にはならなかった。一方、岸本選手は、予選50秒95の3着で決勝進出はならなかった。4台目を越えたあたりでハムストリングスの違和感からレース後半失速し、予選落選に終わった。

女子100mH

女子100mHには青木選手と紫村仁美選手の2名が出場した。青木選手は、予選を13秒48(+0.4)の2着で通過し、決勝は13秒63(+0.2)の5着、一方、紫村選手は予選を13秒87(-0.7)の2着で通過し、決勝は13秒74(+0.2)の7着に終わった。青木選手は、日本選手権で負傷した肩の脱臼の影響で充分なトレーニング、そしてそれに裏打ちされる自信が持てなかったことが敗因だと感じる。一方、紫村選手は、予選、決勝ともにスタートからうまく加速に乗れないレースであった。スタートへの反応がナーバスになりすぎ、得意の前半で思うようなレースを展開することができなかったのが敗因であろう。

女子400mH

女子400mHには宇都宮選手が出場した。宇都宮選手は、予選を57秒99の2着で通過し、決勝は58秒97の7着に終わった。予選は我々が考えていた通りのレース(歩数戦略)でまだまだ余裕のある内容であったが、決勝は緊張とレース経験の乏しさからか、ピッチが上がりすぎてしまい、5台目以降の歩数がバラバラになり、そこから立て直せないままレースを終えてしまった。

(男女ハードルコーチ 前村 公彦)

【男子走幅跳】

男子走幅跳の予選は8月25日に行われた。橋岡選手は1回目に8

m03cmを跳躍し予選通過記録を突破し、城山選手は2回目に7m74cmを跳躍し、予選突破記録には達していなかったが、2本目終了時点で5位であり決勝に進める上位12位を確保できると判断し、3回目の試技はパスをして、結果全体の6位で通過した。

翌日の決勝は、橋岡選手が2回目に7m95cm、城山選手は3回目に7m74cmを跳躍し8位以上の入賞を確実にした。4本目以降、城山選手は徐々にタイミングが合い始め、5本目に7m98cmと記録を伸ばし、4本目はファールであったが8mを超える惜しい跳躍であった。橋岡選手は1本目の跳躍時に腰を痛め、2回目以降の思い通りに跳躍を行えない状況の中、6本目に8m05cmと記録を伸ばした。

今回の目標はメダルの獲得であった。残念ながら橋岡選手が4位、城山選手が5位とメダル獲得は達成することはできなかったが、橋岡選手は3位(8m09cm)に5cmと迫るなど、両選手がメダル争いに加わったことは収穫であった。(男子走幅跳コーチ 森長 正樹)

【男子走高跳】

男子走高跳には戸邊選手、衛藤選手が出場した。過去にない予選が実施されたが両選手とも2m10、2m15を1回で成功、最少の跳躍本数で予選を通過すると同時に好調さが確認できた。決勝では試合前の練習跳躍で衛藤選手の踏切脚の膝内側(鷓足部)に突発的な痛みと腫脹が生じ出場が心配された。初めの負傷部位で帯同の医師とも相談したが本人の強い意志で競技を決断、テーピングでの固定とアイシングの応急処置で競技に臨んだ。2m10、2m15を1回目、2m20を2回目、2m24を3回目で成功したが痛みが悪化したため、2m28は成功の見込みがないと判断し、棄権を決断した。銅メダルと同記録ながら試技数差で6位、負傷がなければつい思わざるを得ない結果であった。一方の戸邊選手は2m15、2m20、2m24を1回で成功、順調に試合を進めたが、メダル確定の勝負どころの2m28を3回失敗した。好調だったものの跳躍が流れ気味という技術的な問題を最後まで引きずり跳躍の高さを出し切れなかった。しかしながらノーマス功を奏し銅メダルを獲得した。優勝は2m30のWANG YU (CHN)、2位は2m28のWOO SANGHYEOK 選手(KOR)。3位から7位までが2m24であった。

(男子走高跳コーチ 福岡 博樹)

【男子棒高跳】

男子棒高跳は山本選手と竹川選手の2名が出場した。竹川選手は5m00からスタートしたが1回目はボールが柔らかく流れた跳躍になり失敗した。2回目は硬いボールに変更して成功したものの、助走後半がやや失速していた。次の高さの5m20は3回とも失敗して11位で終了した。5m20の失敗は3回とも5m00同様に助走後半の失速によるものであった。本来の実力、本来の小気味よい助走ができていればメダル圏内だっただけに残念である。

山本選手は5m30から跳び始め、1回目で成功。続く5m50、5m60をそれぞれ2回目、1回目に余裕をもって成功することができた。YAO JIE 選手 (CHN) は5m60を1回失敗し、2回目以降をパス。それ以外の選手は5m60をクリアすることができなかった。バーは5m65に上がり、山本選手とYAO選手との一騎打ちとなった。共に1回目失敗し、試技順が先のYAO選手が2回目を失敗して3回連続無効試技となり、この時点で山本選手の優勝が確定した。山本選手は更にバーを5m70の大会新記録に上げ、これも余裕をもって成功させた。続く日本新記録の5m84は、湿度が高く予想以上に長い競技時間が影響して3回失敗したが、12年振りの金メダル獲得は大いに東京オリンピックに繋がる成果であった。

(男子棒高跳コーチ：小林史明)

【男子三段跳】

本大会に向け、合宿等を重ねる中で山下選手の成長は著しいものであった。特に技術面での進歩が明らかであり、跳躍練習においても安定感が増していた。山下選手は少しずつではあるが着実に歩みを進めるタイプである。シーズン前半は少々タイミングが合わなかったものの良いパフォーマンスが見られていた。好調のままアジア大会へ臨めることが事前の準備としては必須と考え、当初計画していた海外遠征を行わずに技術の定着に集中した。その結果、大会当日のパフォーマンスを見るとそれが正解だったと感じた。メダルの獲得を目標としていたため、16m46という記録で4位なのは残念ではあったが、国際大会でのこれまでのベストパフォーマンスであったことから、今後に繋がる大会となった。

(男子三段跳コーチ 杉林 孝法)

【男女投擲】

投てき全般については、各選手のPBおよびSBに対する記録の達成率が極めて悪く、今年度最も重要視されるべきアジア大会における成果としては、厳しい評価を下さざるを得ない。特に、メダルターゲットである男女やり投は、各選手において今季最低記録であり、本来の力を発揮すればメダルを確保できていたため、その原因については深刻にとらえ反省しなければならないと感じた。

その一端として、選手全員が国際大会の経験が豊富であり、遠征や海外での試合に対する不適応が、この結果を招いたとは考えにくい。おそらく、国内における個々のトレーニング状況やモチベーションの管理などに問題があった可能性が考えられる。この点については、個々の選手の反省を把握し今後の日本チームとしての改善策を講じる必要がある。

試合までのトレーニングについては、トレーナーからのチェック結果の報告にて確認を行った。チェック結果からはそれほどマイナス要因を感じることはできなかったが、結果から考えれば、どこかに原因があったかもしれない。今後はメディカルに応じ、選手のコンディショニングの管理を徹底しなければならない。

現地調整については、サブグラウンドでの投てき練習が比較的自由に行うことができ、ウエイトトレーニングも必要量実施できたため、問題なく実施できた。したがって、成績の悪さは現地調整が原因ではなく、やはり本来的な調子が上げられていなかったと考えられる。

(男女投擲コーチ 田内 健二)

【男女混成】

混成競技は、十種競技2名、七種競技2名の計4名をエントリーした。

結果は、十種競技で右代選手が、タイ、中華人民共和国の新鋭勢力に先攻される試合展開であったが、後半しっかりまとめ2014年の仁川アジア大会に続き2連覇した。また、中村選手も銀メダルまであと僅かな差であったが、2大会連続で銅メダルを獲得した。

七種競技は、山崎選手が初めての日本代表であったが、自己記録をマークして、熾烈な争いを制し、見事銅メダルに輝いた。ヘンプヒル選手は、1年前の台湾ユニバーシアードにて十字靭帯を損傷(棄権)してから僅か1年で復活を果たし、6位入賞した。

競技条件としては、非常に蒸暑い状況の中でフィールドにて日陰が確保できない状況や、運営情報の錯綜など苦労した場面があったが、暑熱対策として事前の情報や現地でエアコンの使える控え室において、室温を種目直後、休憩中、次の種目の直前など状況に応じて設定変化を実施し、上下スウェットを着るなど工夫して過ごすことで、競技中の暑さを緩和することができた。競技前のアイシングの重要性を感じた場面などの収穫もあった。

2020年の東京オリンピックに向けて、この結果をステップにして更なる努力し、世界で戦える準備をしなくてはならない。十種競技は、常に国際大会において8000~8100点の確保、得意種目の取りこぼしをしない対策を継続し、国内での競争構図を更に構築すること、海外のコーチとのコラボ強化も加えて行きたい。七種競技は、単一種目においても日本で勝負をできるように強化をし、6100点台を記録していくことをターゲットにすることが大切である。今回400mHで7位に入った宇都宮選手も加え、3人で競い合っればレベルを引き上げて欲しい。

(男女混成コーチ 松田 克彦)

【男女3000m障害】

3000m障害は男子塩尻選手、山口選手、女子石澤選手が出場した。各専任コーチからのコンディション報告から、男女共にメダル、入賞のチャンスがあると考えていた。

男子はラストのスピード勝負では勝算が薄いため、塩尻選手が終始積極的に先頭を走り、1000mを2分47秒、2000mを5分39秒と得意な展開へ持ち込めた。また障害前のスピード低下、集団でのエネルギーを回還することで、自身の走りに徹する事ができ、ベストに近い走りで銅メダルを獲得した。アフリカから国籍変更した中東勢の一角を崩しての銅メダル獲得は評価できる。今後は世界大会を意識したレース、8分20秒前後で走るための取り組みが必要である。

女子は序盤からスローペースで展開し、急激なペースアップに対応できなかった。スタート直後の位置取りから、ロスが多く、一気にペースアップした時点で余裕がなく、対応できなかった。8位入賞したが経験不足が浮き彫りとなった。

男女共に国際大会においてシーズンベストを出せるようにすることが、ピーキングを含め、今後の日本選手の課題である。男女共に東京オリンピックを見据えて、実践的な取り組みの中でこの経験を

今後につなげていきたい。(長距離・マラソン統括 河野 匡)

【女子長距離】

代表選手3名は日本選手権後も順調にトレーニングが積めており、5000m、10000m共にメダル獲得を目標にレースに臨んだ。しかし、両種目共にスローペースの展開から日本選手が先頭に出て積極的にレースを進めたが、レース序盤のペース変動に対応することができず、10000mに出場した堀選手は7位、5000mに出場した鍋島選手、山ノ内選手は4位、6位となり残念ながらメダルを獲得することはできなかった。

結果論ではあるが、コンディションが高湿多湿ではあったが、両種目ともにメダルラインが5000m15分36秒78、10000m32分12秒78であったため、国際舞台でも100%の実力を発揮できればメダル獲得は到達可能な範囲であった。

今後の課題としては、大舞台で実力を発揮するメンタル面の強化、ペース変動に対応するトレーニングの方法の見直し、スプリント能力向上、レースプランの共有や2名でのレースコントロールする戦略が挙げられる。

以上の課題点を基に、強化スタッフ、強化選手、専任コーチと協働する体制作りを行い、2019年のドーハ世界選手権大会、2020年の東京オリンピックに向かっていきたい。

(女子長距離コーチ 野口 英盛)

【男子マラソン】

今回の男子マラソンは21人で争われ、井上選手と園田選手が出場した。午前6時のスタート時点で気温が26度、湿度が80%を超える蒸し暑さの中、レースは序盤からスローペースとなり、25km過ぎから園田選手が9人の先頭集団を引っ張る形となった。レース後半は強い日差しとなり気温が30度を超過して先頭集団が5人に絞られるサバイバルレースとなる中、37kmすぎにバーレーンのELABBASSI選手(前回の仁川アジア大会は10000mの金メダリスト)がペースを上げ、5人の先頭集団から井上選手だけがついて行き、優勝争いは2人に絞られた。その後、お互いにスパートをかけ合うもの並走が続き、2人は並んだまま競技場のトラックに入ったが、残り100mを切ったところで井上選手が猛スパートをかけ、追いついたELABBASSI選手と接触しながらも振り切り、2時間18分22秒のタイムでゴールし、金メダルを獲得した。園田選手は中華人民共和国のDUO BUJIE選手との3位争いでしたが40km過ぎにスパートされ4位という結果であった。

レースの終盤しっかりと主導権を持ってレースを動かすことができれば日本選手が1、2位となることができるレースだった。2020年までレースを積み重ね勝ちパターンをしっかりと掴んで欲しい。また暑熱対策はこれまでのデータ蓄積が今回のレースでも効果を出している。引き続きデータの分析を行い真夏のレースで成果のある対策を練りたい。

(男子マラソンコーチ 黒木 純)

【女子マラソン】

野上選手、田中選手がメダル獲得を目標にスタートに立った。スタート時の気温は27℃、湿度は前日よりは低めで男子マラソン時より良いコンディションだった。

スローペースでスタートし、野上選手が積極的に先頭を引っ張り、田中選手は集団後方でレースを進めた。25kmの給水地点で、CHELIMO ROSE選手(BRN)がスパートし、30kmまでに34秒差をつけ単独での先頭となり、その後も少しずつ後続を引き離れた。野上選手はKIM HYE SONG選手(PRK)、CHOI Kyungsun選手(KOR)の3名で2位集団を形成し、田中選手は集団から離れ10位での単独走となった。2位集団にいた野上選手は、36km付近でCHOI選手が離れ、40km地点でKIM選手が離れ、単独の2位となり銀メダルを獲得した。田中選手は1つ順位を上げ9位でゴールした。野上選手は現状の力を発揮することができたが、田中選手は力を発揮することができず不本意な走りになってしまった。

暑さ対策として、他国に比べたら給水を直前まで冷やす対策はとれていたが、ここでの準備がまだ足りない部分があった。男子マラソンの井上選手のように給水に保冷剤を付け、給水後に持って走るなどの工夫が必要だと今大会を通じて感じた。

(女子マラソンコーチ 吉井 賢)

【男女競歩】

男子20kmWは、5kmを21分46秒前後で通過と比較的ゆっくりとしたペースでレースが進んだ。しかし高橋選手が8km過ぎから遅れ始め、ペースが上がった10kmでは先頭から39秒差と大きく差を開いてしまった。12km過ぎからは山西選手と中華人民共和国の

WANG Kaihua選手との一騎打ちの形となった。19.5kmまで二人は先頭争いを繰り広げたが、残り500mでWANG選手がスパート。山西選手がついて行けず、WANG選手金メダル、山西選手が銀メダルとなった。高橋選手は第5位でフィニッシュした。

男子50kmWは暑さのためか5kmが23分46秒、10kmが46分58秒と非常にスローペースでレースが進んだ。丸尾選手、中華人民共和国のWANG Qui選手が先頭を争う中、勝木選手は暑さへの対処のため、やや後方でレースを進めた。30kmで丸尾選手に勝木選手が追いつき、WANG選手が大きく遅れ始めた。34km付近で3回の警告を受けた勝木選手が5分間のピットインする中、丸尾選手が大きくリードを広げたが、40kmから一気にペースダウンしたため、勝木選手は5分間の遅れを45kmまでに取り戻し、最後は大差をつけてのフィニッシュとなった。2位にはWANG選手が入り、丸尾選手はなんとか4位でフィニッシュした。

女子20kmWは序盤から中華人民共和国2選手が激しく争い、岡田選手がインド選手と3位争いをする展開となった。岡田選手は10kmで中華人民共和国選手と54秒差となったが、3位を死守すべく粘り強く戦い、最後はインド選手に1分20秒以上の差をつけて銅メダルを獲得する健闘を見せた。

(男女競歩コーチ 今村 文男・清水 茂幸)

【トラック&フィールド総括】

本競技大会では、ID&ADカードの発行枚数が限られるため、全ての種目の担当コーチが選手村やウォームアップエリアに入ることができない。そのため、担当コーチとの連絡、選手村外に滞在しているコーチとの連絡と調整や、コーチが手薄な種目についてのサポートに回った。また、インドネシアは国際競技会運営に馴れていないせいか不備が目立ったため、マイナーな抗議や確認などを行い、選手が安心して競技を進められるように努力した。トラック&フィールド統括という立場として競技会試技での対応より、選手を安心してウォームアップエリアから競技場へ送り出すことが重要と考え、手薄なスタッフなどの手伝いを積極的に行った。コーチやスタッフの努力のおかげで、選手たちからはとても満足のいくサポートしてもらったとの声を聞き、まずは初期段階の評価をもらったと感じている。

【男女マラソン総括】

男子は井上選手、園田選手、女子は野上選手、田中選手が出場した。今年度のランキングから見て、男子は金メダル、女子はメダル獲得を目標とした。ライバルは男女共にバーレーン勢で、特に女子は昨年の2017年ロンドン世界選手権の優勝者チェリモ選手(BRN)がエントリーしていたので、確実にメダル獲得を狙うことを確認して現地入りした。

スタート時間が暑さを考慮して朝6時に設定されたが、東京オリンピックと同じ環境下が想定されたので、本連盟が取り組んでいる「2020東京オリンピック暑熱対策プロジェクト」の成否を確認する位置づけとして大会に臨んだ。

男子は井上選手がゴール前の接戦を制して32年ぶりの金メダル獲得。園田選手も終盤までメダル争いを繰り広げたが惜しくも4位に終わった。女子は野上選手がチェリモ選手には付かず、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国勢との2位争いを制し見事銀メダルに輝いた。

暑熱対策から得られた知見の中で、レース中の体温を上げない方法を試みたが結果から判断して効果はあったと評価している。またレース前後の体重、及び体温を測定するなど、いくつかのデータ収集を実施したが、今後に生かしたい。

マラソンは選手のコンディショニングと当日の環境への対応力が勝負の分かれ目になると改めて感じた今大会であった。



第26回日・韓・中ジュニア交流競技会 韓国大会を終えて

全国高等学校体育連盟陸上競技部 競技力向上委員長 大林和彦

平成30年8月22日から29日にかけて、韓国・全羅南道 麗水市で第26回日・韓・中ジュニア交流競技会（11種目）が、日本選手団253名、韓国選手団247名、中国選手団247名、全羅南道選手団247名の参加を得て、日本体育協会・各競技団体の主催により開催されました。

陸上競技については、三重県で行われた全国高校総体の上位選手から選考された男子11名、女子10名の日本を代表する選手達が集結し、スタッフ5名、トレーナー1名併せて27名の参加となりました。会場は麗水市のマンマ陸上競技場で、試合及び練習の運営を韓国陸上競技協会が行い、他国に大変配慮した使い勝手の良い競技場でした。宿舎はオーシャンリゾートホテルに宿泊しました。選手はコンドミニアムの大部屋（5～6名）でフローリングの床にシーツのない薄い敷き布団で就寝する非常に過酷な条件の中、愚痴一つ言わずお互い楽しく生活していました。食事については朝食、昼食（大会時は弁当）夕食ともにバイキングで種類も豊富でしたが、選手達は食事のバランスを考えサプリメント等を摂って日々飽きがこないような食事を摂取していました。また、天候は目まぐるしい7日間となりましたが、大会時には好天に恵まれ良い環境で競技ができました。

遠征での日程については、以下の通りです。

- 8月22日 日本選手団集合（前泊宿舎：ホテルマイステイズプレミア成田）
指導者ミーティング 結団式
- 8月23日 出発移動（成田空港発→釜山空港着→The Ocean Resort）
- 8月24日 練習（マンマ競技場）・競技別指導者ミーティング・開会式
- 8月25日 大会1日目＜第1戦＞（マンマ競技場）
- 8月26日 大会2日目＜第2戦＞（マンマ競技場）・フレンドシップ交流
- 8月27日 練習（マンマ競技場）
- 8月28日 文化探訪・ウォーターパーク体験（宿舎内 ※任意参加）
- 8月29日 帰国（釜山空港発→成田空港着）解団式 解散

第1戦の25日は朝7時45分からバスで競技場に移動し、10時競技開始でトラック種目はすべて決勝のみ行われ、フィールド種目については6回の試技で行われました。大会では自分の種目が終了した選手がスタンドに集まり応援をし、徐々にチームも打ち解けていきました。23種目中、男子10種目、女子8種目、計18種目で優勝しました。全体的に中国選手と競り合うことが多い中、



勝利した種目が多かったと思います。また、本年度は連日の試合で第2戦が27日行われました。チームの雰囲気は大変良く、お互い打ち解けた中、励まし合いながらの試合となりました。21種目中、男子9種目、女子9種目、計18種目で優勝しました。全体的に連続の試合ということもあり、体調面で疲れがあったと思いますが、概ね良いパフォーマンスを出してくれたと思います。2試合ともに近年では最多の優勝数となりました。

夕方からは全競技団体のフレンドシップ交流となり、各国の代表競技団体（2チーム）のスタンプがあり大いに盛り上がりました。

この遠征は国際大会で言葉も通じず、日々の生活で不自由な所がありました。チーム一丸となってお互いが工夫し、困難な状況も乗り越え、良い雰囲気でも過ごす事

ができました。これも選手を日々指導されておられる指導者の皆様の教育活動のおかげによるものであり、スタッフ・トレーナーの皆様の気遣いもあったからだだと思います。お礼とともに大変感謝します。出場した今回の選手の多くが2020年東京オリンピック出場や日本陸上競技界を担うアスリートに成長してくれることを願っています。

最後になりましたが、この大会に際しまして、御協力、御尽力いただいた（公財）日本体育協会、（公財）日本陸上競技連盟、（株）アシックスジャパン、（株）明治、各校選手指導者の皆様、スタッフの皆様に対しまして、心より感謝申し上げますとともに、今後ますます発展されることを祈念いたしましてお礼とさせていただきます。今後とも、宜しく願いいたします。

第26回日・韓・中ジュニア交流競技会/麗水市（韓国）
期日：2018年8月25日（土）【1日目】

男子リザルト

選手名	記録	順位	備考
100m 桑野 拓海	10.82	1位	-0.6
200m 高木 悠圭	21.32	1位	0
400m 荘司 晃佑	48.35	1位	
1500m 樋口 翔太	3:49.47	1位	
110mH 阿部 龍斗	13.93	1位	+0.9
走高跳 柴田涼太郎	2m07	2位	
走幅跳 海鋒 泰輝	7m34	1位	+1.1
三段跳 松田 基	15m29	1位	+1.3
砲丸投	稲福 颯	17m20	2位
	山下 航生	16m34	5位
円盤投	山下 航生	52m37	1位
	稲福 颯	46m45	4位
やり投	中村健太郎	67m49	1位
4x100mR	1.阿部 龍斗	40.68	1位
	2.桑野 拓海		
	3.高木 悠圭		
	4.荘司 晃佑		

女子リザルト

選手名	記録	順位	備考
100m 景山 咲穂			DNS
200m 壹岐あいこ	24.05	1位	+0.4
400m 高島 咲季	55.57	1位	
800m 山口 真実	2:12.11	1位	
1500m 萩谷 楓	4:29.44	1位	
100mH 小林 歩未	13.94	1位	+0.8
走高跳 大滝 佐和	1m73	2位	
走幅跳 高良 彩花	6m07	2位	-1.0
砲丸投	大野 史佳	14m43	1位
円盤投	齋藤 真希	44m33	1位
やり投	西川 明花	45m58	2位
4x100mR	1.高良 彩花	46.57	1位
	2.高島 咲季		
	3.小林 歩未		
	4.壹岐あいこ		

第26回日・韓・中ジュニア交流競技会/麗水市（韓国）
期日：2018年8月26日（日）【2日目】

男子リザルト

選手名	記録	順位	備考
100m 桑野 拓海	10.63	1位	+1.5
200m 高木 悠圭			DNS
400m 荘司 晃佑	48.82	1位	
1500m 樋口 翔太	3:51.73	1位	
110mH 阿部 龍斗	13.83	1位	+2.9
走高跳 柴田涼太郎	2m01	3位	
走幅跳 海鋒 泰輝	7m31	1位	+3.0
三段跳 松田 基	15m08	1位	+1.0
砲丸投	稲福 颯	17m25	3位
	山下 航生	16m16	5位
円盤投	山下 航生	55.23	1位
	稲福 颯	47.95	3位
やり投	中村健太郎	67m47	1位
4x100mR	1.阿部 龍斗	41.24	1位
	2.海鋒 泰輝		
	3.高木 悠圭		
	4.荘司 晃佑		

女子リザルト

選手名	記録	順位	備考
100m 景山 咲穂			DNS
200m 壹岐あいこ	24.15	1位	+2.1
400m 高島 咲季			DNS
800m 山口 真実	2:11.54	1位	
1500m 萩谷 楓	4:20.82	1位	
100mH 小林 歩未	13.85	1位	+1.9
走高跳 大滝 佐和	1m70	1位	
走幅跳 高良 彩花	6m18	1位	+2.6
砲丸投	大野 史佳	13m93	1位
円盤投	齋藤 真希	48m46	1位
やり投	西川 明花	43m21	2位
4x100mR	1.高良 彩花	47.10	1位
	2.高島 咲季		
	3.小林 歩未		
	4.壹岐あいこ		

2018コンチネンタルカップ報告

強化委員会男女3000mSCオリンピック強化コーチ 岩水嘉孝

大会概要：

コンチネンタルカップが2018年9月8日(土)、9日(日)、チェコ(オストラバ)で開催された。IAAFが主催するアメリカズ・ヨーロッパ・アフリカ・アジア・オセアニアの4大陸の対抗戦で、種目別の順位得点の合計で競われ、各種目1位8点・8位1点(リレーは1位15点・2位11点・3位7点・4位3点)が加算された。今大会では3000mと3000mSCにおいて残りの4周(1400m)から最後尾の選手がレースを辞めなければならないルールが適用された。徐々に人数が絞られ、ラスト1周で上位4人に絞られることになる。ラスト4周以降、各周で最後に通過した選手は、レースから除外されるため、順位は付くが「DNF」という扱いになった。判定地点(ゴール地点)の直前では必然的にペースが上がり、最後尾にならぬよう位置取りで揉み合うなど、通常のレースとは違うレース展開に会場は盛り上がっていた。

アジア・オセアニア選手団として、日本からは男子4名、女子3名、役員4名がアジア陸連から推薦され、大会に派遣された。日本からは東京オリンピックへ向けた強化対象選手を積極的に派遣する事で、今後の強化へ繋げていきたいという考えがあった。エントリーしている他国の選手は、格上の選手も多く出場しており、「チャレンジ」をテーマとし、先ずは現状の力を出し切ることを目標に挑んだ。

現地の環境：

オストラバはポーランドとの国境近くチェコの東に位置し、プラハから陸路で5時間弱の移動時間を要する為、移動による疲労対策が必要とされた。

オストラバは最高気温が20度前後で湿度が低く、日本に比べ、肌寒い気候であった。競技場はヨーロッパの競技場にしては珍しく、サブトラックが隣接されており、出場選手の人数も1種目8人と参加人数も少ない為、混雑する事がなく、練習環境は良かった。

大会が行われたメインスタジアムのサーフェスは非常に反発が小さく、日本国内の反発の大きなサーフェスに慣れている選手は対応に苦慮したのではないだろうか。

試合は14時30分から18時までと非常にコンパクトな競技日程にプログラムされており、競技時間も滞りなく、スムーズに運営された大会であった。また競技中や選手入場時の演出も観客を楽しませる配慮がなされ、終始大会が盛り上がっていた。このようなイベントプレゼンテーションは日本にも積極的に取り入れるべきであろう。また選手についても他国の選手はサービス精神が大きく、ウイニングラン、サイン、

写真等のファンサービスを積極的に行っており、ヨーロッパ諸国の陸上競技人気の理由を垣間見ることができた。

競技結果：

アジア・オセアニアチームは総合3位という結果であった。総合結果は下記の通り。

1位アメリカズ	262ポイント(前回2位)
2位ヨーロッパ	233ポイント(前回1位)
3位アジア・オセアニア	188ポイント(前回4位)
4位アフリカ	142ポイント(前回3位)

前回4位だったアジア・オセアニアチームが今回は3位と前回大会を上回り、日本人選手も貢献できた。

個人においては200mに出場した小池選手が前半積極的なレースを見せ、粘りの走りでも4位、3000mに出場した田中選手は2200m地点でDNFとなったが2000m通過を5分22秒で通過しており、現状の力を発揮出来たと感じる。その他の選手においても、格上の選手が揃う中、「負けたくない選手には勝つ事ができた」といった前向きなコメントが多く、勝負を意識したレースが出来たのではないかと感じる。ダイヤモンドリーグや世界大会のファイナルに残るような選手と競技する事で、肌で感じ、この場で得た課題を今後生かし、このような試合に積極的にチャレンジして欲しい。

前述の3000mや3000mSCの途中で除外されDNFになるというルールを理解していない選手が多く見られた。また、大会終了後に、3000mSCと3000mSCのDNF選手にも仮定の記録がつき、ワールドランキングに必要となるリザルトスコアもポイント化されることが判明した。ワールドランキング制度はまだ細かい規定が確定していないこともあるため、今回のような事例から考えると、今後もIAAFの主催する大会グレードの高い大会には積極的な派遣が必要であろう。

今後は、東京オリンピックを見据え、個々のレベルアップは大前提であるが、このような国際試合を通じて得た課題の対策及びその戦略を考える必要がある。

最後に：

今大会へ向けご協力いただいた所属の指導者、関係者の皆様、日本陸連事務局、アジア大会から連戦で帯同して頂き選手のコンディションを整えてくれた常友トレーナーにはこの場を借りてお礼を申し上げます。大きな問題や怪我無く、無事に大会を終えた事は皆様のご協力のおかげだと思っております。今回の経験が各選手の更なる成長に繋がると同時に、選手が東京オリンピック、更にはその先で活躍する事を願っております。ありがとうございました。

アジア・オセアニア選手団・日本選手結果

出場種目	氏名	所属	生年月日	PB	結果
200m	小池 祐貴	ANA	1995/5/13	20.29	20.57 / -1.6 /4位
110mH	金井 大旺	福井県スポーツ協会	1995/9/28	13.36	13.72 / -0.9 /6位
3000mSC	山口 浩勢	愛三工業	1991/8/19	8:30.98	DNF /5位
400mH	安部 孝駿	デサントTC	1991/11/12	48.68	49.80 /6位
100mH	木村 文子	エディオン	1988/6/11	13.03	13.39 / -0.1 /6位
400mH	宇都宮絵莉	長谷川体育施設	1993/4/11	56.84	58.92 /8位
3000m	田中 希実	ND 28AC	1999/9/4	8:54.01	DNF /6位

アジア・オセアニア選手団・日本役員一覧

役職	氏名	所属
コーチ	臼井 淳一	ANA
コーチ	岩水 嘉孝	資生堂
トレーナー	常友 綾二	リニアート
渉外	山田真理子	日本陸連事務局

第3回アジアユース陸上競技選手権大会(2019／香港)

日本代表選手選考要項

大会期日：2019年3月15日～17日

開催地：香港

1. 編成方針

今後シニアでの活躍が期待されるユース世代の競技者に、多くの国際経験を積ませることを目的とし、高校生を中心としたチーム編成とする。

2. 参考競技会

2018年度日本陸上競技連盟主催・後援競技会

3. 選考基準

参考競技会の競技成績を基に、強化育成部が推薦する競技者

4. 選考方法

選考基準に則り、強化育成部選考会議にて選考原案を作成し、強化委員長及び専務理事が承認する。

5. 補足

- (1) 対象者は、2002年1月1日から2003年12月31日生まれまでの競技者。
- (2) 種目ごとの代表はアジア陸上競技連盟が定めるエントリールール以内の人数とする。
- (3) リレー種目については、個人種目のエントリー状況などから総合的に判断し、派遣を検討する。
- (4) 代表選手は本連盟が定める義務を遵守するものとする。
- (5) 下記の項目に該当する場合は、代表を取消すことがある。
 - 1) アンチ・ドーピング規準に反した場合
 - 2) 故障等により、競技力を発揮できない事態が生じた場合
 - 3) 本連盟が定める義務を遵守しない場合
- (6) 選考から派遣までの期間を考慮し、代表選手は派遣まで定期的に強化育成部スタッフへのトレーニングの進捗状況を確認に応じる義務を有する。
- (7) 選考後のトレーニング状況の報告により、医事委員会がメディカルチェックの必要があると判断した場合は、応じる義務を有する。

インターハイにおける科学委員会研究活動報告

科学委員会 高松潤二

1. 活動の概要

2018年8月2日から6日までの5日間にわたって、秩父宮賜杯第71回全国高等学校陸上競技選手権大会が三重県伊勢市の三重県営総合競技場（三重交通Gスポーツの杜伊勢）を会場として開催されました。今年も各地区の予選会を勝ち抜いた高校生アスリートによる熱戦が繰り広げられ、2種目で日本高校記録（男子円盤投げ、女子100mハードル）、3種目で大会記録（男子ハンマー投げ、女子三段跳び、女子円盤投げ）が出ました。

科学委員会では、今大会に出場した高校生アスリートを対象として、①バイオメカニクスデータの収集・分析、②体調・食生活状況・スポーツ障害およびサプリメント摂取に関する調査を実施しました。得られたデータは、日本陸連として科学的な観点から研究活動を行う際に活用されるとともに、それら成果を広く周知し陸上競技の普及・啓発や競技力の向上に役立つ知見を創出する等の取り組みを行っています。

今回のような高校総体における研究活動は、1991年の世界陸上東京大会におけるバイオメカニクス研究特別班の活動を契機として、日本選手権をはじめとする主要大会での日本選手や外国の有力選手を分析するという活動と同時並行的に始まり（1993年の栃木インターハイ以降）、今回が25回目の活動となりました。活動の内容は開催年毎に多少の変遷していますが、基本的には競技パフォーマンスのモニタリングと分析であることはかわっていません。ここまで継続してこられたことに加え、活動の内容が充実したものになったのは、今大会を含めてこれまでお世話になりました主催者の方々をはじめとする関係各所のご協力のたまものです。

さて、得られたデータは日本陸上競技連盟のウェブページや定期刊行物（陸上競技研究紀要）、陸上競技マガジン等で公表しています。そして、近年、全国各地で開催される高体連合宿における指導者研修会やオリンピック育成競技者研

修合宿における競技者への講義等、これまでに得られたデータが参照資料として活用されています。例えば、ある選手の2～3年間の競技記録とバイオメカニクスのデータの変化のようすや、日本や外国のトップ選手とのデータ比較を通して、現状のジュニア期の選手の課題を明らかにしたり、今後の展望について検討を加えたりするといったことです。

2. 活動メンバー

今年度は、トラック種目の担当スタッフの人数を昨年から4名減らし、計17名のスタッフ体制で活動を行いました。活動にあたっては、以下に示す4つのグループに分かれて活動を行いました（◎は各グループの主任）。

〈短距離・障害〉◎貴嶋孝太、柴山一仁、福田厚治、

大橋廉、山元康平

〈中・長距離〉◎榎本靖士、中村康宏

〈跳躍〉◎清水悠、柴田篤志、大津卓也、松下翔一、

渡邊孝道

〈投てき〉◎高松潤二、村上雅俊、前田奎、野中愛里、

澤田尚吾

※順不同、敬称略。

これら活動メンバーは、科学委員会の委員のみで構成するのではなく、分析担当スタッフの後進育成や各地域との連携等を視野に入れて委員外からも選考されています。

3. 活動の内容

(1) バイオメカニクスデータの収集・分析とフィードバック

バイオメカニクスデータは、主としてビデオカメラとレーザードップラー型速度測定器を用いて収集しました。ビデオカメラはレースパターンの分析や2次元または3次元の動作分析を行うため、1つの種目につき1～3台のカメラ（トラック種目ではさらに多くの台数）で撮影しました。カメラは一般に購入可能な民生用のものですが、毎秒100コマ以上で撮影可能なハイスピードカメラを使用する種目もありました。

表1 女子やり投げの上位8名のリリースパラメータ

	投てき記録 (m)	リリース速度 (m/s)	リリース角度 (deg)	リリース高 (m)	迎え角 (deg)
1位：西川 明花	50.87	20.18	34.2	1.61	-3.6
2位：山元 祐季	49.12	21.14	34.5	1.64	-2.7
3位：亀谷 実生	47.34	20.57	38.9	1.99	15.2
4位：星 佳奈	47.23	19.94	37.5	2.09	6.6
5位：河田 菜緒	46.92	19.76	38.0	1.94	3.7
6位：石垣 綾香	46.70	20.52	31.7	1.62	1.5
7位：中村 怜	46.22	20.11	35.4	1.74	11.8
8位：松永 莉穂	45.73	19.91	31.1	1.56	4.7
武本@山形IH (H29)	56.44	22.46	31.4	1.71	1.3
長@岡山IH (H28)	56.48	23.0	38.8	2.02	-0.4
北口@和歌山IH (H27)	56.63	23.0	37.0	1.98	-4.5
世界トップ平均値	61.21	23.6	36.7	1.74	3.6

※世界トップは2007年世界陸上大阪大会における上位12名のデータの平均値です。

また、動作分析にはキャリブレーションと呼ばれる作業を行います。長さの分かっている物差しのような棒を競技が行われるエリアに設置して事前または事後に撮影しました（この作業にあたっては、大会運営にあたられていた審判や補助員の皆様に大変ご協力を頂き、この場を借りてお礼申し上げます）。カメラ映像は競技場内の分析ルームにもちかえり、その場で分析作業を行いました。速度測定器は100m走や走幅跳の助走等、直線的に疾走する選手の走速度を測定するために用いました。これによって得られるデータを速度曲線としてグラフ化することで、走パフォーマンスの比較が簡便にできるようになります。

以上のようにして得られたデータは、データフィードバック用の帳票としてまとめられ、種目毎に競技場の正面入り口周辺に設置して頂いた科学委員会用の掲示板へ掲出しました。例として、表1には女子やり投げのリリースパラメータ、図1には男子ハンマー投げのハンマーヘッドに作用する力の推定値の分析結果を示しました。表1についてはこれまでも掲示・公開していたものですが、分析対象者を拡げて（これまでは多くても上位3名程度）、できるだけ上位入賞者のデータを算出するようにしました。また、図1のようなデータはこれまでほとんど公開していませんでしたが、投てき種目については位置や速度といった運動学的（キネマティクスの）なパラメータだけでなく、選手の努力感や筋出力の実態と関係性が強いと考えられる力の推定データを掲示する試みをしました（本誌のバイオメカニクスレポートでは力に加えて投てき種目に大きく関係する“パワー”というパラメータも算出しています）。データの精度については未だ完璧とは言えないところはありますが、今後、このようなデータを積極的に提示した上で、パフォーマンスとの関連性について検討を

引き続き行いながら、現場のコーチや選手の皆さんとより深い議論を進めていきたいと思っております。なお、すでにお気づきだった方もおられると思いますが、今年度から各種目の優勝者の連続写真を掲出していません。これには様々な理由がありますが、最も重要だったのは、連続写真の作成にかかっていた多大の労力と時間を、できるだけ多くの選手の皆さんを対象に即時分析することに割くということでした。どうぞご理解頂くようお願いしたいと同時に、このようなデータの掲示に関してご遠慮なく希望・要望をお聞かせ頂ければ幸いです。

(2) 体調・食生活状況・スポーツ障害およびサプリメント摂取に関する調査

この調査では、各種目の上位入賞者8名（8チーム）を対象に質問紙と返信用封筒を配布し、質問紙に回答した上で返信して頂くという形式をとりました。質問紙の質問項目は実施年度によって多少の変遷をしていますが、基本的には栄養摂取（サプリメント含む）に関することや競技生活の中で発生した外傷や障害、専門種目に関する事等からなります。得られたデータは、陸上競技の普及・啓蒙や育成・強化に資する知見を導き出すための基礎的な資料として活用させて頂きます。

4. おわりに

今回のインターハイでは、トラック班のスタッフを最小限にして活動を行いました。これは予算的なこともありますが、国際大会を含む様々な競技会において日本や世界のトップ選手のデータを継続的かつ広範囲に効率よく収録できるようにすることが、今後の日本陸上競技界にとって有益な情報を提供するために必要であるからです。少人数での活動ですので、優先順位をつけざるを得ない場面はありますが、東京オリンピックの後を見据えながら粛々と研究活動を続けていきたいと思っております。

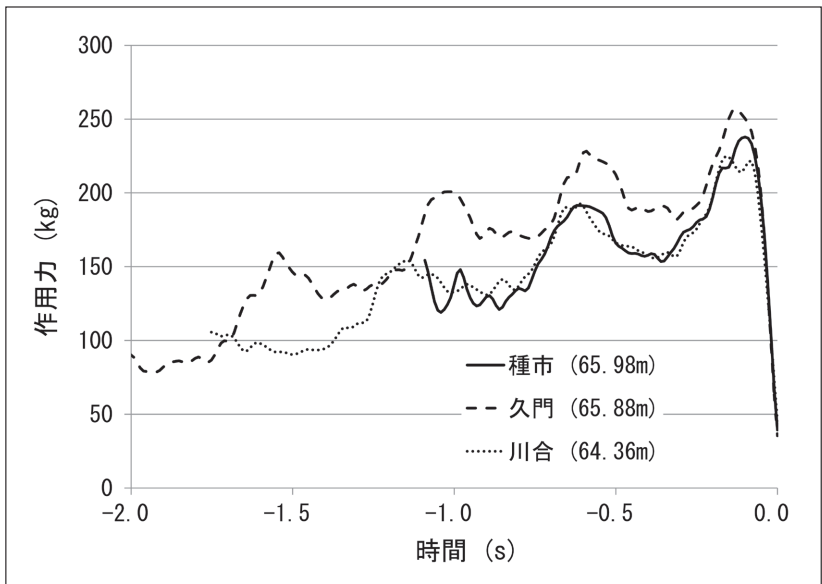
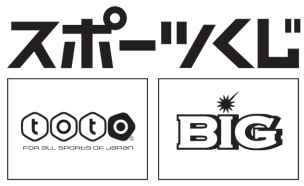


図1 男子ハンマー投げ上位3名のハンマーヘッドに作用する力の推定値
 ※ 選手がハンドルを介してハンマーに加えた力の推定値（単位はkg）。時間ゼロがリリース。

と思います。なお、この大会期間中に掲出した帳票データは、日本陸上競技連盟のホームページからダウンロードが可能になる予定ですので（「日本陸連について」→「委員会情報」→「科学委員会」の順にクリック）、興味・関心のある方はぜひ閲覧してみてください。

最後に、科学委員会の活動に対してご理解・ご協力を賜りました関係各所の皆様に重ねてお礼申し上げます。



文部科学省認定
教員免許更新講習会



2018年度

／ 走る！跳ぶ！投げる！ ／
**基礎から学ぶ
陸上競技コーチング**



**JAAF公認 ジュニアコーチ
兼 日本スポーツ協会公認スポーツリーダー養成講習会**

陸上競技「走・跳・投」の基本 全て教えます！

—— ジュニア指導者向けの講習会 2018年度全国14会場で開催！ ——

詳しくは **日本陸連 ジュニアコーチ** で検索

受講料

- 共通科目・専門科目：25,000円＋決済手数料
- 共通科目免除者：15,000円＋決済手数料
- 免除適応コース承認校在校生：10,000円＋決済手数料
- ※別途、指定テキストの事前購入が必要です。

申込期間／申込方法

6/1(木)～各会場開催初日の約1ヶ月前 ※詳細はチラシ裏面の一覧を参照

※申込はWEBのみの受付となります。日本陸連HPをご確認ください。

主催 公益財団法人日本陸上競技連盟、公益財団法人日本スポーツ協会

主管 公益財団法人日本陸上競技連盟普及育成委員会、開催陸上競技協会

2018年度

JAAF公認ジュニアコーチ

兼 日本スポーツ協会公認スポーツリーダー養成講習会

(文部科学省認定教員免許更新講習会)



開催要項

1. JAAF公認ジュニアコーチ講習会とは

ジュニアコーチ講習会は主にジュニアの指導者を対象に陸上競技の「走・跳・投」の基本技術の指導方法を習得することを目的に開催いたします。

※本講習会は日本スポーツ協会公認スポーツ指導者制度に基づき実施いたします。
※本資格を取得する為には「スポーツリーダー(共通科目)」「ジュニアコーチ(専門科目)」を受講し合格の上所定の手続きを行う必要があります。

2. 講習概要・料金

(1) 講習日程:各会場3~4日間、1日8~10時間(理論・実技)

(2) 受講料:共通科目・専門科目受講:25,000円+決済手数料

共通科目免除者:15,000円+決済手数料

免除適応コース承認校在校生:10,000円+決済手数料

※一旦納入された受講料は、理由の如可を問わず返金しません。

※申込み後、本年度中に受講ください。

※別途、指定テキストの事前購入が必要となります。

3. 申込期間・申込方法

申込期間 6月1日(木)~各会場開催初日の約1ヶ月前

申込方法 日本陸上競技連盟HP「ジュニアコーチ講習会申込ページ」より申込

※WEBのみの受付となります。FAX、書類等での受付はできませんので予め承ください。

※共通科目が免除の方も「ジュニアコーチ講習会申込ページ」よりお申込ください。

※お申込には「RUNNET(ランネット)」の登録が必要となります。

【共通科目が免除される条件】

1. すでに日本スポーツ協会公認スポーツ指導者資格を保有している場合。
 2. 「免除適応コース修了証明書」を保有している場合。
 3. 「免除適応コース承認校」に在籍している場合。
 4. その他関連資格を保有している場合。
- 詳細は日本スポーツ協会HPをご確認ください。

【専門科目免除の方】

JAAF公認ジュニアコーチ専門科目修了証明書取得者(全国小学生陸上競技指導者中央研修会修了者、IAAF CECS Level1、Level2を取得した者)

【免除適応コース承認校在学学生の方】

(※卒業後に日本スポーツ協会に申請すると共通科目が免除になる場合があります)

※免除適応コース承認校とは

日本スポーツ協会が実施しているスポーツ指導者養成講習会と同じカリキュラムを承認校で履修することができ、講習・試験の一部またはすべてが免除されるシステムです。

【教員免許更新講習充当希望の方】

本講習会にお申込みの上、日本陸上競技連盟HP「ジュニアコーチ講習会申込ページ」に掲載の「申込書」を各会場開催日の1週間前までに提出してください。

◆開催会場・日程一覧

開催地	日程	会場	〆切
青森	11月10日(土)・11日(日)・12月22日(土)・23日(日)	青森陸上競技場・青森武道館	10月1日(月)
福島	9月1日(土)・2日(日)・15日(土)・16日(日)	福島大学	7月23日(月)
埼玉	9月30日(日)・10月20日(土)・21日(日)・27日(土)	上尾運動公園陸上競技場	8月20日(月)
東京1	8月24日(金)・25日(土)・26日(日)	ナショナルトレーニングセンター	7月17日(火)
東京2	11月2日(金)・3日(土・祝)・4日(日)	ナショナルトレーニングセンター	9月25日(火)
新潟	11月3日(土・祝)・4日(日)・23日(金・祝)・24日(土)	新潟医療福祉大学	9月25日(火)
滋賀	11月24日(土)・25日(日)・12月8日(土)・9日(日)	立命館大学	10月22日(月)
大阪	8月12日(日)・13日(月)・14日(火)	万博記念競技場	7月2日(月)
兵庫	12月26日(火)・27日(水)・1月13日(日)・14日(月)	ウインク陸上競技場(姫路市陸上競技場)	11月19日(月)
和歌山	8月10日(金)・11日(土・祝)・15日(水)・16日(木)	紀三井寺競技場	7月2日(月)
広島	1月26日(土)・27日(日)・2月2日(土)・3日(日)	広島文化学園大学・中国電力坂スポーツ施設	12月17日(月)
山口	1月12日(土)・13日(日)・14日(日・祝)	みらいふスタジアム	12月3日(月)
徳島	9月29日(土)・30日(日)・10月27日(土)・28日(日)	鳴門教育大学	8月20日(月)
福岡	8月10日(金)・11日(土・祝)・12日(日)	博多の森	7月2日(月)

*日程・会場は変更になる場合もございます。変更の場合は別途お知らせいたします。

*開始時刻は8時~9時、終了時刻は18時~20時を予定しております。(会場によって異なります。)

◆本件に関するお問合せ

公益財団法人日本陸上競技連盟 ジュニアコーチ連絡担当窓口

TEL 042-319-2263

Eメール fukyu-info@jaaf.or.jp

AIMS理事会・総会報告

専務理事 尾 縣 貢 (AIMS 理事)

国際マラソン・ディスタンスレース協会 (AIMS = エイムズ) の理事会と総会がエストニアの首都タリンで開催され、AIMSの理事として両会議に出席した。

世界へのロードレースの浸透を目的に1982年に設立されたAIMSは、世界の主要レースが加盟する任意団体で、国際陸上競技連盟 (IAAF) の協力団体でもある。IAAFと共同でコース計測の基準を策定し、道路競走の世界記録承認の統一した条件づくりを進めてきた。1990年～2010年には、本連盟の帖佐寛章顧問が会長を務めていた。

AIMS理事会は基本的に年2回、総会は2年に1回の開催であり、総会では都度、理事の半分ずつが改選となる。4年前の総会で理事に選出された私にとって、今回、任期最後の理事会であった。理事会の会期は9月4日 (火)～5日 (水)、総会は6日 (木)～8日 (土)。今回のタリンでの理事会と総会開催は、2年前のAIMS総会で4つあった候補地のなかから投票で決定された。今年は、エストニア建国100年にあたり、2万4000人が参加する同国最大のスポーツイベントであるタリンマラソンに、世界のマラソン関係者を招いて祝福の気持ちを共有したいという地元関係者の思いを強く感じた。AIMS総会出席への歓迎夕食会には、自身もマラソンを走るという女性大統領が出席。国をあげての歓迎ムードが印象的だった。

それぞれの報告は、下記の通り。

【理事会】

AIMS理事会は、スペインのパコ・ボラオ氏以下、副会長2名、専務理事1名、財務担当理事1名、理事5名の計10名で構成されており、会長以外の出身国は、メキシコ、オーストラリア、イギリス、アメリカ、南アフリカ、チリ、チェコ共和国、ハンガリー、そして日本となっている。このほか、マーケティングと広報の専門家、アドバイザーとして参加している。

◆議題

1. 前回議事録の承認
2. 会長報告
 - 総会の実施方法
 - AIMS法人化と定款改訂
 - AIMSの社会貢献とAIMS内の委員会活動
 - ガラとシンポジウム準備状況
3. 各種報告事項
 - 広報担当からの報告
 - 機関誌及びウェブ担当者からの報告
 - 距離計測など技術面についての動向
 - 加盟レース数の動向
 - 財務及びマーケティング
 - AIMS主催チルドレンレースの実施報告
 - マラソン博物館 (ベルリン) について
 - 総会準備状況報告
 - ガラとシンポジウム準備状況報告

理事会の最大の関心事は、加盟レースをいかに増やすかである。加盟数は年々、増加しており2018年9月現在447レースを数えることが報告された。パコ会長は2020年までには加盟500レースを目指すとの目標を掲げた。

今回の総会に向けて、定款の改訂が提案されるにあたり、特につぎの2点が確認された。①AIMS法人化に伴う所在時を登記上、ルクセンブルクとすること、②理事選挙は、会長、財務担当理事、理事の3カテゴリーとし、副会長を選ぶ投票は撤廃。当選した理事の中から会長が副会長を指名すること。

AIMSの主要な事業には、年4回の機関誌「Distance Running」の発行と、途上国で実施しているチルドレンレースがある。特に機関誌発行にあたってはIAAFからの費用支援がなされてきたが、減額されることが報告された。チルドレンレースには現在、世界的飲料メーカーの財政支援を受けているが、事業の継続のための独自財源確保は重要であり、いかにスポンサーを増やすかについて理事会では多くの時間が割かれている。

また年に3回、世界の主要マラソンのエキスポでAIMS広報のための展示ブースを出展しているが、欧米レースに偏りすぎではとの指摘があった。AIMSメンバーも増えているアジアをもっと重視す

べきであり、日本のレースへの出展も検討してはとの意見があった。このほか理事会では、AIMSがIAAFと共同で基準を策定した道路コース計測に関連し、自転車計測の世界的現状や自転車計測員の動向について報告がなされた。IAAFが導入するワールドポイントラッキングのロードレースでは、国際認証が必要であり、国際自転車計測員増が望まれる。国際自転車計測員の昇格のための会議が2019年4月に実施されるとのことであり、日本の計測員も事前資料の提出など、昇格に向けた準備が必要である。

【総会】

総会には、加盟447レースのうち、約140の参加があった。総会は、つぎの4部構成となっていた。

1. 理事会からの年次報告
2. 定款の改訂
3. 講演とシンポジウム
4. 選挙 (次回総会開催地決定と理事改選)

◆理事会からの報告

AIMSのパコ会長から、年々加盟レースが増える現状のもと、AIMSの目的としてつぎの3つが示された。

- ①安全 (テロ等防止と医事的の両面)
- ②女性参加
- ③環境

IAAFもロードレースの取り込みに力を入れ始めており、AIMSとしての独自性を高める必要を強調するなかでパコ会長は、①チルドレンレースの世界展開、②IAAFとの協働によるコース計測、③シンポジウムの実施、を主要推進事業としてあげた。

◆講演

3日間の総会のなかで、年次報告や定款改訂など主要議題の後、世界のレースが抱える課題の共有や解決を目的とした講演が行われ、複数の立場からの登壇者があった。

テーマはつぎの通り。

- ロードレースのスポーツイベントとして評価
- タリンマラソンの市経済に及ぼす好影響
- ランニングイベントに女性参加者を増やすに必要なこと
- マラソンムーブメントの世界的発展
- マラソンでの安全の確保。シカゴマラソンの事例
- ボストンマラソンでの気象面での医事対応-WBGTの活用

以上のテーマは、パコ会長が強調するAIMSの目的に添ったものであり、それぞれの分野における専門家による講演はたいへん有意義な内容であった。なお、講演の詳細は、AIMSのホームページに掲載されることになっている。

◆選挙

AIMSでは、2年ごとに開催される総会で、理事の約半分を改選しており、今回は、会長1名、財務担当理事1名、理事4名が改選となった。

会長選挙は、パコ現会長 (スペイン) 以外に立候補がおらず、128票の信任を得て続投が決まった。財務担当理事選挙は2名の立候補があったが現職が当選。

理事選挙には、日本から、名古屋ウィメンズマラソンのレースディレクターである岡村徹也氏に立候補いただいた。AIMS創設以来、ずっと日本は理事を継続しており、今回もポストを維持するために、日本陸連としても最大限の支援を行った。国内すべてのAIMS加盟レースに協力を呼びかけるとともに、岡村氏と連携しながらの入念な選挙準備を経て総会に臨んだ。岡村氏による、立候補者によるスピーチは、女性単独の世界最大レースという名古屋の特色をアピールする画像を多用した素晴らしいものであり、総会参加者からの評価も非常に高かった。

結果、岡村氏は、トップ当選した現副会長 (メキシコ) にわずか3票と迫る112票を獲得し2位当選を果たした。このほか、チリとモロッコからの候補が当選。パコ会長は、理事会メンバーが、世界のすべてから大陸から選ばれたいをたいへん喜んでいて。

岡村氏には、日本のAIMS加盟全レースの代表して、AIMSの一層の発展のため活躍を期待している。

なお今回の総会開催地も総会での投票で決定し、3つの候補地のなかから、ジョージアに決定した。

大会観戦ガイド

第102回 日本陸上競技選手権リレー競技大会

リレー日本一を決定する日本選手権リレー！
今年より北九州陸上競技カーニバルと同時開催！
北九州市立本城陸上競技場へ是非お越しください！

- ▼日時：10月27日（土）～10月28日（日）
▼場所：北九州市立本城陸上競技場
福岡県北九州市八幡西区御開4丁目16-1

▼アクセス：

【北九州市内より】

- JR鹿兒島本線[大牟田行]・折尾駅→JR若松線[若松行]・二島駅→徒歩・約23分
- JR鹿兒島本線・折尾駅→市営バス30番 二島駅行→「本城陸上競技場前」下車 徒歩・約3分

【北九州市外より】

- JR鹿兒島本線 [小倉行]・折尾駅→JR若松線 [若松行]・二島駅→徒歩・約23分
- JR鹿兒島本線・折尾駅→市営バス30番 二島駅行→「本城陸上競技場前」下車 徒歩・約3分

▼種目

【日本選手権リレー】

- 〈男子2種目〉 4×100mリレー、4×400mリレー
〈女子2種目〉 4×100mリレー、4×400mリレー
〈特別種目〉 U18男女混合4×400mリレー

▼問合せ先：日本陸上競技連盟

TEL：03-5321-6580 / FAX：03-5321-6591

▼日本陸連WEB内
大会ページ

日本選手権リレー
<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1324/>



日本選手権リレー（混合）

第40回北九州陸上カーニバル

日本グランプリシリーズ最終大会！年間のシリーズチャンピオンがついに決定！！是非、ご注目ください！

- ▼日時：10月27日（土）～10月28日（日）
▼場所：北九州市立本城陸上競技場

福岡県北九州市八幡西区御開4丁目16-1

▼グランプリ種目

- 〈男子2種目〉 走高跳、砲丸投
〈女子1種目〉 砲丸投

▼日本陸連WEB内大会ページ

<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1336/>

▼グランプリシリーズ

WEBページ

<http://www.jaaf.or.jp/gp-series/>



北九州カーニバル

第72回福岡国際マラソン選手権大会

兼 ドーハ2019世界陸上競技選手権大会日本代表選手選考競技会
兼 第102回日本陸上競技選手権大会男子マラソン
兼 マラソングランドチャンピオンシップシリーズ2018-2019～
東京2020オリンピック日本代表選手選考競技会～

男子マラソンのトップランナーが福岡に集結！

日本代表の座を巡って、白熱の戦いを展開します。日本屈指の実力者たちが世界の強豪に挑みます。



福岡国際マラソン

▼日時：12月2日（日）

12時10分スタート

▼会場（スタート・フィニッシュ）：福岡・平和台陸上競技場

▼アクセス：

- ・福岡市地下鉄「大濠公園」、「赤坂」駅 下車徒歩8分
- ・西鉄バス「大手門・平和台陸上競技場入口」バス停下車徒歩5～8分

▼コース：福岡朝日国際マラソンコース（平和台陸上競技場・大濠公園～福岡市西南部周回～香椎折り返し）42.195km

▼参加標準記録：

- 【Aグループ】フルマラソン 2時間27分以内
30km ロードレース 1時間35分以内
ハーフマラソン 1時間05分以内
【Bグループ】フルマラソン 2時間35分以内
30km ロードレース 1時間45分以内
ハーフマラソン 1時間10分以内

▼問合せ先：福岡国際マラソン事務局（朝日新聞社西部企画事業チーム内）TEL：092-411-1137

▼日本陸連WEB内大会ページ

<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1292/>
大会公式サイト

<http://www.fukuoka-marathon.com/index.html>



一般財団法人岡山陸上競技協会

〒700-0012 岡山市北区いづみ町2-1-11 岡山県陸上競技場内
TEL.086-214-3156 FAX.086-214-3156
http://www.tiki.ne.jp/~oka-rikkyou/

ジャカルタ・アジア大会400mH安部(デサント)が銅メダルを獲得した。ユース五輪へも金光(岡山操山高3)が代表に選出されており、日の丸を胸に活躍してくれている両名の姿は地元にも大きな活力となっています。

この夏には岡山で全日本中学校選手権が開催され、砲丸投で全日本中学校新記録で見事な優勝をした奥山(上道2)・走高跳3位周藤(石井3)・4×100mR7位(旭東)が地元として活躍をみせてくれました。岡山陸上競技協会も競技役員として中学生の若々しい姿をサポートすることができ、感動をいただきました。

トラックシーズン後半を迎え、福井国体ではユース級の選手はいませんが、チーム岡山のために精一杯の力を振り絞りたいと思っています。トラックシーズンがおわると、マラソン・駅伝シーズンを迎えることとなりますが、11月には第4回となるおかやまマラソンが行われ、岡山中心部を走り抜け人気も高まっています。

県民の声援で全ランナーを応援したいと思います。

また、今後行われる実業団駅伝・高校駅伝・都道府県駅伝でも選手の活躍を期待したいと思います。

(文責:強化委員長 広瀬洋介)



一般財団法人山口陸上競技協会

〒753-0815 山口市維新公園4-4 維新百年記念公園陸上競技場内
TEL.083-920-6125 FAX.083-920-6125
http://yaaf.jp/

山口陸上競技協会は、一般財団法人化となって今年で9年目に入り、今年2018年は第4期の2年目となります。元山口県知事の二井関成氏を新しい会長に迎え、組織の改編や専門委員会業務等の見直しを適宜行い、選手強化・競技運営力の向上をめざし山口県の陸上競技の発展のために尽力して参る所存です。

今年6月に第102回日本選手権を開催し、無事終了することができました。2日目の男子100m決勝の際には来場者数が2万人を超え、維新みらいふスタジアムの観客動員記録を更新。最終日には男子110mハードルと男子円盤投での日本新記録誕生は記憶に新しいところです。このような全国規模の大会を地元で開催することによる短期・中期・長期の相乗効果をねらい、ジュニア世代を中心とした選手強化面、競技役員の世界交代を含めた競技運営面でも今後準備をすすめていきたいと考えています。さらに、昨年から6月開催となった日本陸連後援の田島直人記念陸上競技大会をアジアパースミットとしてより発展させた大会に成長させることも急務として取り組んでいます。

明るいニュースとしては、U20世界選手権大会で、宮本大輔選手(周南市出身、東洋大学1年)が100mで8位入賞。力強い走り、県民に勇氣と希望を与えてくれました。

また、ジュニア層を中心に全国大会での活躍のあった夏でした。

高校総体では男子3000m障害で菅浦敦司(西京)が3位。女子400mHで才原麻衣(西京)が6位入賞。全日本中学校では、男子800mで平本光紀(下関中等教育学校)が4位、吉中祐太(向洋中)が7位とダブル入賞。男子400mでは山田彩翔(彦島中)が7位入賞を果たしました。全国小学では、6年女子100mで久保理乃(萩陸上)が5位に入賞しました。今後の活躍に期待したいところです。



一般財団法人広島陸上競技協会

〒730-0011 広島市中区基町4-1
県立総合体育館(公財)広島県体育協会内
TEL.082-223-3256 FAX.082-222-6991
http://hiroshimaf.org/

2018年度前半の広島の記事といえば、山縣亮太選手(セイコー・広島・修道高校出身)の活躍である。4月の織田幹雄記念国際陸上大会から、日本選手権、そしてアジア大会と日本中が注目し、9秒台の夢へ心躍らせた。

広島は、7月の西日本豪雨災害により、多くの命を失い、多くの地域が被災した。川が氾濫し車や自動販売機が流れ、山は崩れ、高速道路が崩壊し、線路や幹線道路を飲み込み、土砂が家屋に流入した。一夜にして想像をはるかに超えた別の地を思わせる景色に一変した。一度に県内の多くの地域が被災したため、なかなか復興に至らず、避難所生活が長引いた。そんな8月、多くのボランティアが被災地を訪れる中、東京からオリンピアンも、被災地を訪れた。子どもたちは家や避難所からの外出もままならない。グラウンドは土砂置き場、体育館は避難所。プールは緊急散水用となり、使用禁止。大人は、ひたすら土砂を運び出し、道路は、重機と緊急車両が行き来している。土砂、災害ごみ、土糞、粉塵と子どもが遊べる環境はない。オリンピアンたちは、自宅避難をしている児童生徒や避難者を集めて、避難所になっている体育館で共に体を動かした。私も同行したが、こんなに体を動かすことが、人の心を動かすことに繋がると今まで感じたことはなかった。あの日からほとんどもと見ることもなかった子どもたちの自然な笑顔が見られた。仲間と手をとって、声を出して楽しそうに体を思いっきり動かした。スポーツっていいなと率直に感じた。

そんな中、アジア大会が開催され、様々な種目の選手の活躍が、連日、大きく報道された。この夏のアジア大会での山縣選手の活躍は、日本中が注目した。中でも出身地広島の復興を願う気持ちは、広島県民に伝わった。地元プロ野球チームの着を身に付けて走ったことも話題になった。100m自己記録タイ10秒00で初の銅メダルに輝き、そして、400mRでの金メダル獲得は、どれだけ元氣と勇氣を届けてくれたか。「より速く」「より強く」を追求する姿勢は、少年時代から変わらない。これからの活躍を祈るばかりである。命と向き合う中で、スポーツの偉大さを感じた忘れられない夏となった。

(文責:企画広報委員長 藤原文代)



一般財団法人徳島陸上競技協会

〒770-0044 徳島市庄町5丁目27-4 杉本様方気付
TEL.088-635-6181 FAX.088-635-6181
http://www.jaafokushima.com/

2018年度徳島陸上競技協会の競技力強化策について

本協会は、本県の中高校生陸上競技選手の競技力の向上・強化やジュニア期の児童生徒の基礎競技力向上をめざして事業を進めている。

一般、高校生については、強化委員会主催の合同練習会において県外より講師を招聘し強化に努めている他に、県中長距離記録会等の県内外の選手が多く参加できる機会をつくっている。特に、練習や県外指導者からの指導を受ける機会が少ない棒高跳練習会では、高校生から一般まで多くの選手が参加し、好評であった。

また、ジュニア期の中学生以下の選手については、徳島市陸上競技場が昨年度より2年間改修工事期間に入っていることもあり、トラックでの練習の機会を増やすことや指導者からの的確な指導の機会をもつことを目的として種目ごとに、合同練習会を開催している。4月22日を皮切りに、8月までに毎月1回開催しているインターハイに合わせた、ホカリスエットスタジアムの改修も2020年～21年にかけて行われる予定であるため、指導者も選手も有効な練習の場として、これまで以上に強化練習会や合同練習会は重要視されつつある。

その成果として、三重インターハイにおいて、女子400mHで大地彩里選手(徳島市立)が優勝、男子円盤投で三田穂貴選手(生光学園)が2位、男子砲丸投で同じく三田穂貴選手(生光学園)が6位、女子走幅跳で木村美海選手(つるぎ)が5位入賞等の結果を取ることができた。2022年度本県開催が検討されているインターハイに合わせて、ホカリスエットスタジアムの改修も2020年～21年にかけて行われる予定であるため、指導者も選手も有効な練習の場として、これまで以上に強化練習会や合同練習会は重要視されつつある。

今夏の異常気象とも言える高温多湿の状況への対策についても、陸協全体で熱中症予防指針に基づいた行動案の共通理解が進められている。7月半ば以降に開催された県強化記録会、中学通信陸上、四国地区高等学校体育大会各大会で、熱中症が疑われる生徒がいたことも考慮に入れて、大会運営の時間帯の変更や種目の廃止・統合等の対策について競技部、医事部を中心に検討を進めている。



陸協NEWS

JAAF KAGAWA

一般財団法人香川陸上競技協会

〒763-0053 丸亀市金倉町830番地 香川県立丸亀競技場内
TEL.0877-21-5710 FAX.0877-35-9061
<http://gold.jaic.org/jaic/member/kagawa/index.htm>

9月1日から2日にかけて、本県の屋島レクザムフィールドにおいて、第29回日本パラ陸上選手権大会が開催されました。2日間で約5000人以上の来場者が観戦し、選手の熱い戦いに声援を送りました。

今大会においては、アジア新記録が3、日本新記録が15、大会新記録が58、日本タイ記録が2といった好記録が次々にマークされるなど非常に盛り上がった大会となりました。大会中は県内の社会福祉法人がうどんやソフトクリームなどの販売も行い、様々な関係者が関わり合い協力して運営する素晴らしい大会になったと思います。また、県内の小中学生、高校生は今年も全国で素晴らしい活躍をいたしました。

8月18日に日産スタジアムで行われた、全国小学生陸上競技交流大会では、樋笠六星選手（大見小）がジャベリックボール投で大会記録をマークし、優勝しました。岡山県で開催された全日本中学校陸上競技選手権大会では、鹿田真翔選手（飯山中）が110mHで優勝、大山桜花選手（香川第一中）が800mで優勝するなど好成績を残しました。

三重県で行われたインターハイでは、田中怜奈選手（観音寺第一高）が女子棒高跳で第1位を獲得し、2年連続で本県の選手が優勝するという快挙を成し遂げました。また、4×100mRでは四国学院大学香川西高校が2位、男子棒高跳では野村元将選手（四国学院大学香川西高）が8位、女子棒高跳では山地里奈選手（観音寺第一高）が5位という結果を残しました。

本協会では今後とも陸上競技の普及、選手の強化にますます力を入れていきたいと考えています。（文責：事務局 高瀬裕介）

JAAF KOCHI

(NPO) 高知陸上競技協会

〒781-0311 高知市春野町芳原2485 春野総合運動公園内
TEL.088-841-9940 FAX.088-841-9940
<http://npo-kochi.sports.coocan.jp/>

高知県内には、公認大会開催可能な第3種以上の陸上競技場が3ヶ所あります。高知市内に2ヶ所と西部の宿毛市に1ヶ所です。高知県は東西に170キロと長いのですが、中心にある高知市以东には、全天候型トラックを備えた競技場はありません。

しかしながら、ようやく県東部の県立野市青少年センター陸上競技場を改修し、フィールド内に天然芝を備えた全天候型陸上競技場となることになりました。来年夏には、第3種公認競技場に生まれ変わる予定です。写真判定装置も設置する予定で、県内東部地域のアスリートにとっては、普段の練習のみならず、競技大会の開催により、競技力向上に大いに役立つはずで、また県内アスリートの利用のみならず、2020年東京オリンピック開催に向けて、合宿招致にも有効となります。

このような行政の環境整備を好機ととらえ、競技団体としては、完成後の活用方法を考えていかねばなりません。（文責：総務委員長 島津卓）

JAAF EHIME

一般財団法人愛媛陸上競技協会

〒790-0004 松山市大街道3-6-2 岡崎第五ビル501
TEL.089-968-2229 FAX.089-968-2231
<http://www.ehime-rikujyo.jp/>

この度の「平成30年7月豪雨」で亡くなられた方々に謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。一日でも早い復興を祈念いたします。また、愛媛県へ全国各地からの温かい激励、ご支援にも大変感謝いたしております。愛媛陸上競技協会では被災地区の厳しい状況も鑑みて、県高校新人大会の開催方法や日程などを高体連と協議の上、変更して実施する予定です。

さて今夏も、県内各地区での大会や予選会、そして東海地区での全国高校総体や岡山での全日中、横浜での日清小学陸上などの各種全国大会へも多くの県代表選手が出場し活躍しました。特に、河添千秋選手（松山北高）の三段跳での日本高校新記録樹立（12m96）やIH制覇・走幅跳準優勝、久門大起選手（今治明德高）のハンマー投でのIH準優勝などは光り輝いています。また、池田海選手（松山北高校）が110mHでの日本高校1年歴代新記録（14'43）を樹立しました。昨秋の「えひめ国体」に向けて、愛媛陸協全体で何年も取り組み続けてきた「ジュニア強化」という幾多の種が、ひとつひとつ、美しい大輪の花を咲かせ始めています。

今秋の福井国体はもちろん、えひめ国体【後】からの結果が重要であると考えています。そのために、「ジュニア強化」の更なる充実を続け、様々なレガシーを活用、発展させながら、より一層レベルの高い強化に励み、是非とも東京2020に繋げていきたいと考えております。（文責：強化委員長 福羅史力）

JAAF FUKUOKA

一般財団法人福岡陸上競技協会

〒812-0011 福岡市博多区博多駅前2-1-1 福岡朝日ビルB2F
TEL.092-474-0002 FAX.092-474-0002
<http://www.fukuriku.com/>

今年の第72回福岡国際マラソン選手権大会は、来年、ドーハで開催される世界選手権代表選考会と第102回日本選手権を兼ねて12月2日に開催されます。すでに、8月8日に事務局を開設、申込がWeb申込に一本化されています。9月26日が締め切り日です。また、東京2020オリンピック日本代表選手選考競技会位置づけられています。昨年の大迫選手のような新人選手登場を期待しています。

今年は、10月27、28日に北九州市本城陸上競技場で第102回日本選手権リレー競技を開催します。2月のクロカンを含め、日本選手権というタイトルがついた競技会をこれだけ同一県で開催するのも珍しい現象でしょう。気が引き締まる思いです。来年6月には陸上競技の日本選手権も開催します。8月のリハーサル大会では多くの課題が浮き彫りになりました。これから、福岡陸協の総力を結集して準備に万全を期したいと考えています。

他にも、この期間中は、全日本実業団女子駅伝統一予選会（プリンセス駅伝）、大規模市民マラソンとして定着しつつある福岡マラソンや北九州市若松区で開催される九州実業団毎日駅伝など注目度の高い競技会の運営が続きます。各大会を円滑に運営したいと考えています。

なお、福岡国際マラソン選手権大会の公式ホームページは次の通りです。

第71回福岡国際マラソン選手権大会
<http://www.fukuoka-marathon.com/>

（文責：総務部長 橋本忠志）



事務局からのお知らせ

◆◆ドーハ 2019世界競技選手権大会に向けた戦いが始まっています!◆◆

2019年9月27日～10月6日、カタール・ドーハで開催されるドーハ 2019 世界陸上競技選手権大会のマラソン・競歩の選考競技会は下記の通りです。

是非、競技場・沿道で代表をかけた熱い戦いに応援をお願い致します。

〈男子マラソン〉

- ・ 2018 北海道マラソン 2018年8月26日(日) 終了
- ・ 第72回福岡国際マラソン選手権大会
2018年12月2日(日) 開催
- ・ 第68回別府大分毎日マラソン大会
2019年2月3日(日) 開催
- ・ 東京マラソン 2019 2019年3月3日(日) 開催
- ・ 第74回びわ湖毎日マラソン大会
2019年3月10日(日) 開催

〈女子マラソン〉

- ・ 2018 北海道マラソン 2018年8月26日(日) 終了
- ・ 第4回さいたま国際マラソン大会
2018年12月4日(日) 開催
- ・ 第38回大阪国際女子マラソン大会
2019年1月27日(日) 開催
- ・ 名古屋ウィメンズマラソン 2019
2019年3月10日(日) 開催

〈男子競歩〉

- ・ 第57回全日本50km競歩高島大会
2018年10月28日(日) 開催
- ・ 第102回日本陸上競技選手権大会・20km競歩
2019年2月17日(日) 開催
- ・ 第43回全日本競歩能美大会
2019年3月17日(日) 開催
- ・ 第103回日本陸上競技選手権大会・50km競歩
2019年4月14日(日) 開催

〈女子競歩〉

- ・ 第57回全日本50km競歩高島大会
2018年10月28日(日) 開催
- ・ 第102回日本陸上競技選手権大会・20km競歩
2019年2月17日(日) 開催
- ・ 第43回全日本競歩能美大会
2019年3月17日(日) 開催
- ・ 第103回日本陸上競技選手権大会・50km競歩
2019年4月14日(日) 開催

◆◆ジュニアオリンピックの動画を公開します!◆◆

10月12日(金)から10月14日(日)まで、神奈川・日産スタジアムで開催する第49回ジュニアオリンピック陸上競技大会の動画を昨年に引き続き公開致します。激戦の模様をもう一度、お楽しみ下さい。

アクセスは <https://www.jaaf.or.jp/news/article/12137/> まで

注 ※ アクセス先は昨年と異なりますのでご注意ください。



陸連時報編集委員

◇編集委員

- 横川 浩 (陸連会長)
- 友永 義治 (陸連副会長)
- 八木 雅夫 (陸連副会長)
- 尾縣 貢 (陸連専務理事)
- 麻場 一徳 (陸連強化委員長)
- 風間 明 (陸連事務局長)
- 高橋 克実 (陸上競技マガジン編集長)

◇時報編集室責任者

- 大嶋 康弘
- ◇時報編集担当
- 繁田 進
- 石塚 浩
- 青木 和浩
- 宮田 宏
- 廣瀬 静香

陸連時報編集室

〒163-0717
東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル17階
公益財団法人日本陸上競技連盟 内
TEL 03-5321-6580
FAX 03-5321-6591
WEBサイト <http://www.jaaf.or.jp/>
公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>